

# Fish on Boundaries

盾@文字数制限

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## あらすじ

あるクラスメイトの秘密を知っている少し腹黒でやさぐれた少女——彼女は眠気の中で語った▼『一難去つてまた一難』これほどまでに厄介な言葉も無いという事からついつい書いてしまいました。一人称物のテストとして書いたお試し作品なので、削除する場合もあります▼タグをご覧になると分かりますが、事実上の一発ネタです▼話の都合上ヒロインの口調に難がありますが、予めご了承ください。▼Pixiv様にも同名のタイトルで二重投稿させて頂いています。

# 目次

F  
i  
s  
h  
o  
n  
B  
o  
u  
n  
d  
a  
r  
i  
e  
s

---

1



## Fish on Boundaries

「おつはよおイノツッセー！ 相変わらず死んだ魚みたいな眼してるよねえ！」

「うっさい、殴るよ」

学校の廊下を死んだ魚のような目つきで徘徊しているアタシの名は『猪瀬いのせ 未来みき』

妙に猛々しい苗字なので、親が可愛らしく付けられたであろう名前も妙にややこしい  
高校かん一年生じく。

未来予知とかポールドダンスは出来ないし『ダー！』とかも言わない——つてか、そんなテンションの高いものなどダイキライ。

正確に言えば、私が在学する鳥森学園は中高一貫校。

中等部の内部生であるアタシは、夜中にひたすらゲームをする事しかヤル気を見い出せず、他校へと進学をする親友達をヨソに何も努力をしないままダラーリと高等部へと進学した。

「なんでなのさー！ アカリ、焼き魚の目ン玉大好きなのにさー！」

「んじゃ、アンタを虫眼鏡で焼くつてので許してあげる」

あんまり前に出るのはスキじゃないつていう性格もあつて友達付き合いは控えめ、容

姿もスタイルも中ぐらい……ってやかましいわ。

本当は物凄く口が悪いので、クラスメイト達には少々引かれてるっていうのが本当の話——こう見えても、切実にカレシ募集中です。

「やだやだ！ アツツイじゃんそんなの——」

「ごめんごめん、焼かないし殴らないよ……だからめる前にちよつと静かにしてて？」

傍らにずっと居る鬱陶しい程に元気で明るいこの娘は『前田まえだ 灯あかり』

中等部時代からの数少ない親友の一人だけど、朝は常に彼女への殺意と戦っている。

誰だつて朝は死んだような目をして学校に通うのが普通。しかし、このアカリンはそうじゃない。

何しろ、一日の目覚めはテレビの試験放送っていうモノズキなアカリンは日没までこのテンションで居続けるからだ。

——『朝顔』とはまさしくアカリンにあつたような言葉だと、アタシは素直にそう思う。

私はそんな太陽娘を引き取ってくれる心優しい人々に願いながら、教室の扉を開いた——誰でもいい、この歩く火炎放射器からアタシを助けてください……

「ユリイイ——おつはよおお!!」

「灯ちゃんおはよー。相変わらずテンション高いねえ……」

アカリンが次に目を付けた獲物は——アカリン同様、数少ない内部生かつ親友の一人である『ユリ』こと『神田<sup>かんだ</sup>百合奈<sup>ゆりな</sup>』

当然ながら、百合奈もグリグリと頬ずりをしてくるハイテンションなアカリンに困惑している様子——やはり長年共にした友人ではあるものの、疲れるモノは疲れるだろう……

「当ったり前でしょー！ 朝にテンション低いアカリとかアカリじゃないってー」

「そ、そりゃそうなんだけど……朝から頬ずりされるのはあ……ちよつとしんどいかもお……」

言葉を掛けづらいが、百合奈は大切な親友。朝の挨拶はちゃんと済ませなければ——親しき仲にも礼儀ありという言葉を体現しようとするも、アタシの声は“熱中症”にでもなったかのような細かい煙のように排出された。

「おはよう百合奈……」

周りのオンナノコ達は『ユリ』と親しみを持って呼ばれている百合奈の事を、アタシは名前で呼ぶことにしている——百合奈のコトを分かるなら、名前で呼ぶべきだと思っただから。

「お、おはよう未来ちゃん——死んだ魚みたいな目してるね……」

「ユリも思った!? 朝飯の焼きサンマみたいな眼えしてるよな!」

ちっこくて可愛らしい百合奈はアタシを見上げると、吸い込まれそうな程の大きな瞳でジーンと見つめる。

「お、美味しそうにこんがりと揚がってるね……」

百合奈、少し天然さんなのは知ってる……だけど、アンタまでサンマ定食を食べたいのか——アタシは悲しいよ。

「うん、分かってる。私は所詮秋刀魚の竜田揚げですよ……」

「じよ、冗談だよ!? そ、そんな落ち込まないで!」

少々又けてる百合奈に対し、アタシはあくびをしながら泣きそうになったが……そんな大きな瞳で見つめられたら——更に泣きたくなるよ。

「百合奈、キョーコ達も直に来ると思うし……アカリンの事、ちよつとかまってやってくれない?」

もうアタシを開放してくれ、頼む……お姉さんは疲れたよ。

「う、うん! 灯ちゃん……未来ちゃんへトへトだよ? ちよつと休ませてあげたら?」

「夜中にずーつとゲームしてつからだろおー! ちゃーんと夜8時に寝たらケンコーな



のにさー！」

ありがたい、いい娘だ百合奈——だが少々”天然”なこの娘は、今後起こる災難に気づいてないのだろう。

これで安心して自分の席で寝れる……と思ったもの——そんな夢物語は直ぐに消え去った。

「なあ田端、俺のコーヒー牛乳でピラミッド作ってどうするつもりなんだよー」

「いいじゃねえかー！ 高校生活一発目のピラミッドは机二連結で建設するって決めたんだよー」

「そこ、俺達の席じゃないぞ……不法建築してどうするんだよ」

アタシの席が無くなってる……仲良しこよしなオトコノコ達が謎の建設ラッシュ起こしたせいで、私の帰る家は無くなったようだ。

目の前にそそり立つコーヒー牛乳がアタシを高らかと見つめる——今直ぐにでも蹴り飛ばしてやりたい。

——そんな気持ちでつい口走ってしまった。

「——アタシの席に不法投棄しないでくれる？」

「——またもや悪いクセ発動……イガグリの様に刺々しい言葉をばらまいてしまうのがアタシの最大の欠点。」

本当は「そこ退いてくれる？」でいいのになあと16年間の“悪行”を懺悔する日々。  
 「あ、悪いな猪瀬……すぐ片付けるわ」

「だから言っただろ、俺達の席じゃないんだから……あんまり猪瀬怒らせんなよ？」

怒ってないんです怒ってないんです……ただ単に気難しいだけなんですごめんなさい……

「いいの、大丈夫——だからさっさとそのゴミを退けてくれる？」

腹黒いと思ってる——しかし、アタシの机寝床を占拠しているこのガレキ共ゴミが憎くて仕方ないのだ。

「猪瀬、そんな言い方しなくてもいいじゃねーか」

「最近飲まなくなったと思っただのに、また飲んでるんだ——コーヒー牛乳」

アタシに対して少し険しい顔をしながら話しかけた隣の席の男子——

このボサボサ頭の墨村すみむら良守よしもりという男は、中高一貫校である烏森学園の内部生——そして、このガレキ共ゴミの出処でもある。

買い食いが禁止されていた中等部時代から『眠気覚まし』にと近所のスーパーやコンビニでかき集めては飲み干し、先生に怒られながらも授業中はひたすらと寝通すというモヤシのような学生生活を送っていた……のは、中等部時代の話。

流石に危機感を覚えたのか、高等部に入ってからはある程度ちゃんと授業を受けた事

もあり、成績はそこその位置まで持ち直した上に睡眠に充てていた休み時間には女子ともコミュニケーションを取るなど、外部生として入学してきた女子にはそこそこの評価を受けている——

「そんなの俺の勝手だろ、だからガレキとか言うんじやねえよ」

「エナジードリンクの方が冴えるよ、身体に悪いけど」

「だけど、スミムラくんが”平和”に授業を受けれるようになるまで、数多くの困難が彼を襲った。

ズタボロになりながらも、必死に化け物を倒して倒して倒す日々……  
鳥森の愛すべき息子 間流結界術22代目正統継承者として学園を平和へと導いた頃には、数多くの仲間を失っていた。

「久々に買ったただけだつて……なあ田端」

「ああ、最近メツキリ買わなくなっちゃったもんな」

しかし、そんなスミムラくんの鬨いを皆は知らない——じゃあ、なんでアタシが知ってるかつて？

逆に聞きたい——そんな秘密を教えたがる人なんて居るのかしら？

「校外学習の場所、ヘルサレムズ・ロッド ニューヨークだつてよー。あんなトコ、校外学習に選ぶかね？」

”歩くゴシップバーゲン誌 学校一の情報通”の田端くんが、数カ月後の校外学習先をアタシに教えてくれた。

「なんか異界と世界を学ぼうとかいうテーマなんだろう？ カツアゲさせられないように注意しなくちゃ不味いよなー。なあ良守」

「——そうだな」

スミムラくんが眠そうなトーンで一言返すと、暗い表情で机に伏せた——何か嫌な予感がしたが……アタシは眠い。